

未来への記憶を共有する



人口減少にともない社会の変革が求められる今日、都市の在り方もまた再考を迫られている。近世から近代へ、急激な市域拡張が田園を飲み込んで、当時日本最大の都市「大大阪」を生んだ。その変遷に着目する地域の壁新聞『上町台地 今昔タイムズ』の取り組みを例に、これからの都市再編のヒントを探る。

『上町台地 今昔タイムズ』と「大大阪」のフロンティアへのまなざし

身近な暮らしのなかの歴史を将来につなぐ

大阪の歴史の原点ともいえるべき、都心部を南北に貫く上町台地界隈に軸足を置く、筆者も研究活動の一環で発行に携わっている『上町台地 今昔タイムズ』(※1)という、小さな壁新聞がある。発行の趣旨は次のとおり。(長

い歴史のなかで、天災や政変や戦災、著しい都市化も経験してきた地。時をさかのぼってみると、まちと暮らしの骨格が浮かび上がってくる。自然の恵みとリスクのとらえ方、人とまちの交わり方、次世代への伝え方(中略)。

過去と現在を行き来しながら、未来を考えるきっかけに。(後略)地域の方々に貴重な資料やコメントを提供していただき、身近な暮らしのなかにある歴史を共有し、将来につながる種として

いく試みである。

2015年は、大阪にとって何重にもシンボリックな年となった。「戦後70年」は言うまでもないが、奇しくも「大坂城落城400年」に「道頓堀開削400年」。さらに大阪市が面積・人口ともに全国最大となった大正末期の「大大阪誕生90年」にも当たった。特定の周年のみに価値があるわけではないが、それを機に日常的に歴史を振り返って考える視点を得ることができ

るならば、シンボリヤイも無駄にはならないだろう。

近世大坂と近代大阪の境目「大大阪」へのまなざし

『上町台地 今昔タイムズ』では、2013年から2015年にかけて近世大坂と近代大阪の境目ともなる「大

阪」に関連する題材を取り上げてきた。本稿では、都市の将来に向けて、それらの題材を通して得られた視点を紹介したい。

明治22(1889)年の大阪市制施行時、15・27㎢だった市域は、大正14(1925)年の第二次市域拡張で181・68㎢に一気に広がり、当初の約12倍近く、現市域の大半を編入した。

人口の変遷を追ってみると、市制施行時の人口は47万人だが、第二次市域

拡張で約4・5倍の211万人に達している。この時点で大阪市は面積・人口ともに全国最大の都市となり、「大東京」が誕生する昭和7(1932)年10月まで「大大阪」と呼ばれた。「大大阪」を生んだ第二次市域拡張が、現在の大阪市の構造を形づくっている。つまり、大阪のまちは、400年前の豊臣・大坂城の落城の後、近世に築きあげられた大坂三郷(北・南・天満)を核としつつ、明治後期から周辺地域

を急速に合併・開発し、近代化のスピードとともに拡張していった二重構造を宿している。「大大阪」という時代を振り返るといふ営みは、かつて大阪が急成長を遂げ、活気にあふれていた時代を懐かしむ情緒に浸るといふよりは、むしろ、将来に向けて、歴史的に二重構造を持つ都市が、自らの特性を再認識する機会となる。今後、人口減少にともなう縮退を余儀なくされていくなかで、中心部と周縁部の役割や関

係性をダイナミックに再構築していく可能性を探ることにこそ価値がある。そのようなまなざしで、大阪の近代化を捉えたい。

都市拡大のプロセスをリアルに捉える

近代工業の受け皿となった工場と労働者の住まいや盛り場は、近世大坂の



『上町台地 今昔タイムズ Vol. 1』2013年秋・冬号1面。記念すべき創刊号は、鉄道史から見た大阪の都市変遷に着目し、明治時代の近代化の波を伝える。

周縁部に集積し、交通網の整備に呼応しながら、さらに外側へと広がっていった。「大大阪」の誕生前後に起きた現象は、反転して見れば周辺に広がる数々の村の消失、豊かな田園地帯の市街地化という出来事でもあった。失われた村々や田園は、どんな姿をしていたのか。人々はどんな思いを抱え、変わりゆく風土と対話していたのだろうか。そんな問いが立ち上がってくる。

そこで、大阪の近代の風景に接近していくために、『上町台地 今昔タイムズVol.1』（2013年秋・冬号）では、「鉄道史から垣間見える、近現代・大阪での都市拡大」を取り上げた。都市化の動態を、近代化を支えた鉄路の発達から明快に捉えようとする試みである。明治時代、大正時代、昭和30年代、現代と、四つの時代の地図をベースに、



堤橋次郎「東横堀 丸町の浜にて」大正4(1915)年。都心部でも川で染物屋が布を洗い、風が干し場の染め布をなびかせる光景は、初夏の水都の風物詩だった。

まちはずれの駅の誕生から、徐々に市街地への侵入、郊外への延伸と、鉄道網の広がりをわかりやすく段階的に描いた。同時に、車窓の風景にまつわる地域の方々の記憶を集め、マクロな都市化の視点とミクロな生活実感の視点を接続し、果てしなく拡張していった市街地の変遷のプロセスをリアルな経験として共有することを目指した。

さらに、都市化の動態をより具体的に捉えるために、関連イベントとして、地理学、建築史、まちづくりの各分野から専門家を招き「都市の広がりのなかに消えたもの・残されたものは？ 未来は？」と題するフォーラムを開催した(2014年3月)。

まず、立命館大学准教授の加藤政洋氏が「20世紀大阪都市化の空間文化誌」として、中心と周縁のダイナミズ



2014年3月に開催された上町台地今昔フォーラムVol.1「都市の広がりのなかに消えたもの・残されたものは？ 未来は？」の様子。右から加藤氏、酒井氏、吉田氏。

ムという観点から、近代大阪で一気に進んだ都市拡大のメカニズムをひもとくとともに、戦前の雑誌『大大阪』に昭和7(1932)〜8(1933)年にかけて「大大阪新開地風景」として掲載された記事から、都市と農村がせめぎ合うフロンティアの眺め、居住階層の分化、新たに生まれた消費・娯楽の景観、花街などの新地の郊外化といった都市化の諸相を紹介。

続いて、大阪歴史博物館学芸員の酒井一光氏が、都市化の波に洗われながら、今なお田園の痕跡をとどめる古民家、一方で近代化を象徴する意匠が施された銭湯や長屋やアパートや公舎など、具体例をふんだんに示された。また、建築専門誌『建築と社会』で、昭和4(1929)年頃から「郷土建築」特集が組まれはじめ、当時、明治から60〜70年が過ぎて失われていく建物(江戸期の商家・農家、明治初期の洋風建築な

ど)を惜しみ、記録を残そうとする考え方がすでに生まれていたことも紹介された。関東大震災による、伝統的な建築や景観の喪失経験も影響しているものと思われる。

さらに、立命館大学教授の吉田友彦氏は、上町台地の東に広がる生野・東成界隈の100年を、大正時代に始まる耕地整理と長屋住宅地・商店街の誕生と変化から読み解かれた。時を経て現在の賑わいに至るコアタウンの形成や、新たな世代の商いの展開など、詳細な調査に基づいて店舗の業態や店主の変遷を追い、都市の縁辺部に宿る可能性とまちを更新する力について語られた。

堤橋次郎の画業と作品に宿るメッセージ

まさに「大大阪」誕生前後のまちと村々の変化の渦中に生き、記録に努めた人物がいた。明治29(1896)年、大阪・旧・鶴橋村味原池近く(現・天王寺区味原あたり)に生まれ、鶴橋・猪飼野界隈に暮らして、印刷業を営みながら絵筆を揮った堤橋次郎氏だ。

『上町台地 今昔タイムズVol.1』(2015年春・夏号)では、「文人・堤橋次郎が見つめた大阪 上町台地をかたどった水辺の風景と土地の記憶」と題して、日本画家・郷土史家として

遂げていくとき。橋次郎氏は、大大阪の表面の華やきよりも、その繁栄をしっかりと支える生業や交通のありように注意を払い、発展の一方で失われゆく風土を慈しみ、両者を後世に伝えるべき対象と見定めている。さらには、自らの役割をはっきりと自覚して、記録画家として生きる、清廉な決意と郷土への深い愛情が伝わってくる。

近世・近代の日本文化史の研究者で大阪商業大学総合経営学部准教授の明尾圭造氏は、「生業を持ちながら、郷土の研究、作画に余念がなかった橋次郎をみてみると、如何にも大阪的な画家を想起させる。大正期、博覧会に出品を重ね、様々な賞を受けながら、地域の研究や定点作画に喜びを感じる橋次郎は、もはや展覧会への出品とその評価に一喜一憂する画家ではなかった。自らの生涯をかけて、描く(調査する)対象を定めた橋次郎に人生の潔さを感じるのには私だけであろうか」と評している(*2)。

未来への記憶を呼び覚ます

人がつくるまちや村も、時間軸を持って眺めてみれば、成長と衰退を繰り返していき、生命体のようなものである。そのような存在であることを前提に、都市の将来を考えていかなければならないのだと、戦災を超えて残され



堤橋次郎「平野川 東成郡鶴橋町の北端(三枚橋)」大正4(1915)年。市街化の過程で、急激に失われゆく田園風景を記録した作品は、忘れられた当時の様子を今に伝える。

同氏が残した貴重な歴史資料ともいえるべき作品世界にスポットを当てた。編集にあたって、橋次郎氏の作品や足跡の研究・発表に尽力されている猪飼野

探訪会の足代健二郎氏・小野賢一氏に全面的に協力いただき、橋次郎氏の作

品継承者(直系の孫)堤條治氏の快諾を得て実現したものだ。

上町台地の東に広がり実りを運んだ沃野、慣れ親しんだ田園風景が、河川改修、耕地整理、鉄道網の発達とともに、住宅と工場が建ち並ぶまちへと変貌を

てきた貴重な作品や資料、証言の数々が語りかけてくれる。同時に、目を向けるべき豊かなフィールドが、目の前に広がっていることにも気づかせてくれる。

高度経済成長期に一般化した職住分離の時代から、再び住まいと商い、人と人、人とまちの関係の在り方を組み立て直していく時代を迎えている。都市の中心と周縁の関係も、有機的かつ重層的に編んでいくことで、縮退する都市の活路を開いていけるのではないだろうか。改めて、鉄道の役割も注目されることになる。

『上町台地 今昔タイムズ』や関連フォーラムは、地域の方々をはじめ関係者の理解と協力によって実現している。感謝とともに、制作を通じた考察を今後にも折々に紹介していきたい。

(*1) 『上町台地 今昔タイムズ』(発行:大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所、企画・編集:UCoRoプロジェクト・ワーキング)。プロジェクトの経緯や、発行物のバックナンバー等は、ホームページで公開している。

http://www.og-cel.jp/project/ucoro/event2_kon.html

(*2) 明尾圭造氏論稿「絵筆を持った郷土史家 堤橋次郎『あした』第15号(2013年2月、河内の郷土文化サークルセンター)掲載から。